

テキスタイル、衣服、およびクラフト・デザイン研究への理論的アプローチ (翻訳)

Theoretical Approaches to Textiles, Clothing and Craft Design Studies

リーナ・K・カウキネン<sup>\*1</sup> (翻訳 倉元綾子<sup>\*2</sup>)

Leena K. Kaukinen<sup>\*1</sup>(Translated by KURAMOTO Ayako<sup>\*2</sup>)

(Received October 3rd, 2005)

解説

本稿は、課題に応じて研究を重ねてきたフィンランド、ヘルシンキ大学行動科学学部ホーム・エコノミクス&クラフト・サイエンス学科教授のリーナ・K・カウキネン (Leena K. Kaukinen) 氏の2004年8月、国際家政学会京都大会における発表「テキスタイル、衣服、およびクラフト・デザイン研究への理論的アプローチ」(Theoretical Approaches to Textiles, Clothing and Craft Design Studies)の翻訳である。

日本の大学においては、この30年来家政学における衣食住など、従来から存在する専門領域において、専攻する学生数の変化、学部・学科名称の変更、専門領域の著しい分化、研究者・教育者養成の方法、などに関して、激しい変化が起こってきた。殊に、ともすれば、「料理」「裁縫」と揶揄され、存在意義を問われてきた食物学や被服学においては、その学問的存在意義を明確にすることが求められている。

一方、近年、フィンランドに対してはその高い教育水準と成果に注目が集まっている。特に1992年以降の教育改革のなかで変貌を遂げてきた。教師養成教育を出発点として1890年代に始まった長い歴史を持っているフィンランドの家政学においても、改革が進められてきた。その中で、家政学や生活の中にクラフトやテキスタイルをどのように位置づけるか、どのような意義が存在するのか、ということが重要な課題となった。フィンランド家政学は、これに真剣に対峙し、一定の成果をあげてきている。

本稿の翻訳が、日本における家政学と各専門領域における学問的枠組み、存在意義の再検討のための一つの契機となることを願っている。

<sup>\*1</sup> ヘルシンキ大学行動科学学部家政学・クラフト・サイエンス学科 (フィンランド国ヘルシンキ市, University of Helsinki, Helsinki, 00014, Finland)

<sup>\*2</sup> 鹿児島県立短期大学 (〒890-0005 鹿児島市下伊敷1-52-1, Kagoshima Prefectural College, Kagoshima 890-0005)

## 要約

本論文はテキスタイル、衣服、およびクラフト・デザインの科学研究への理論的、哲学的なアプローチを提供する。この分野に関する知識は、伝統的に産業やマーケティングなどのような、分野に作用する機構に役立つために芸術と工学とに分けられてきた。クラフト・サイエンスは、これらの関心を結合させ、芸術デザインと2次元、3次元の製品製作を、存在論的に絡みあった重なりあう現象と考える。このことは興味深い対話を作り出す。それは、材料をテキスタイル製品という一つの実在に変化させる中では考慮されてこなかった。

背景となる思考は人文学の中では古いものである。しかし、学問研究分野として、これを高めるのはやや新しいことである。言及した事柄のうち、昔から知られている二つの科学枠組みを第3の文化科学と絡み合わせるという見方は、新しい有力なパラダイムを発展させる。これは解釈学的アプローチと実証主義的アプローチとの間、テキスタイル文化の研究とテキスタイル技術との間に、一連の対話を生みだす。クラフト・サイエンスは、ヘルシンキ大学でテキスタイル教員養成教育と結びついて現れた。この領域に貢献した25年の研究にともなって、新しい興味深い事態が現れてきた。これを背景にして、この論文ではまた、そこからそれぞれの製品が実在へと変換される社会的、認識的、技術的スキルの統合としてのスキルに関する新しいアプローチを明かにする。

**キーワード** **Keywords** ; テキスタイル textiles, 衣服 clothing, デザイン研究 design studies, クラフト・サイエンス craft science

## フィンランドにおけるテキスタイル、衣服、クラフト・デザイン研究の位置づけ

テキスタイル、衣服、およびクラフト・デザイン研究、要するにクラフト・サイエンスは、ヘルシンキ大学とヨエンスー大学におけるフィンランドのテキスタイル教員養成教育の独立した科学部門である。ホーム・エコノミクスの一部あるいは領域であったことは一度もなかった。にもかかわらず、現在、クラフト・サイエンスはヘルシンキ大学のホーム・エコノミクスおよびクラフト・サイエンス学科のなかに存在している。

1975年、フィンランド議会は新しい法律を導入した。それは、フィンランドのすべての教員養成は既存の大学に統合されなければならないと言明した。これはまた、テキスタイル教員養成教育が、25年前、1979年に、大学レベルに置かれるようになった道筋でもあった。これは、我が国（フィンランド）のすべてのテキスタイル教員が、主要な科学領域としてのクラフト・サイエンスの博士課程に進むことができるだけの、修士課程レベルに匹敵する質をもっているということでもある。

テキスタイル教員養成教育のための新しい高い地位はまた、修士課程のための強固な科学的背景を必要とした。最も初期には、教育科学が主要な科学として役立った。これとともに、クラフト・サイエンスとしての、テキスタイル、衣服、およびクラフト・デザイン研究の科学的基礎が発達した。この目的を果たすために、1982年、ヘルシンキ大学に教授のポストが設けられ、それに従って、1989年に最初の教授が任命された。教授は、「手仕事によるテキスタイル製品のデザインと製作過

程」を取扱おうと規定された。この規定によって、デザインと製作過程に焦点を合わせた、科学の実在論と認識論を定義する最初の試みが行われた。

これは、似たような、昔からあった知識の教育や解釈とは明らかに異なっている。伝統的に、テキスタイル製品のデザイナーは芸術大学で、製作者は技術大学で教育を受けてきた。コンシューマリズム、分業、および共同製作の専門知識は、これらの大学の教育枠組を代表している。クラフト・サイエンスのアプローチと大量生産とのつながりは、最初の製品製作に見られる。クラフト・サイエンスでは、個々の製作過程の、最初の作品がクラフト製作過程の最終段階になる。大量生産では、最初に加工された作品は原型と呼ばれ、それは原型から商品を大量に作っていく最初の段階である。クラフトになった最初の作品を商業的原型に変換できないということはなく、潜在的に重なり合う部分はオプションと見ることができる。

また、クラフト・サイエンスは、民族学、文化人類学、あるいは芸術史など、大学における他の科学とどのように異なっているかが問題である。これらの科学で研究されたテキスタイルの一部は、見つけられ、与えられているテキスタイル製品とそれらの製作を探求する。その意味では、それらは、文化を変化発展させる革新的なアプローチを全く伴わない、伝統的なテキスタイルを表している。文化的に新しい製品は一般に芸術と技術の中で生まれてきた。それでは、芸術はクラフト・サイエンスのアプローチとどう区別されるか。この問題は、アジアでは特に興味深い。アジアでは、多くの西欧の国のように芸術とクラフトとの間に明確な境界線は描かれてこなかった。

しかしながら、クラフト・サイエンスの発展において、特にそれが科学大学に置かれ、芸術大学に置かれないうきに、この特徴は顕著であった。科学大学の環境は芸術的アプローチよりむしろ科学的アプローチに焦点をあててきた。もっとも、クラフト・サイエンスでは、芸術的アプローチと科学的アプローチの違いは不鮮明だけれども。次に問われるべき論理的な問題はクラフト・サイエンスと技術の違いは何かということである。テキスタイル、衣服、およびクラフトが研究されるとき、技術はたいてい研究的に低い位置に置かれてきた。また、この領域ではほとんど何の知識も想定されてこなかった。また、クラフト技術には興味深い知識の総体が存在する。そして、それは産業の目的のためにも形作られ、価値の面では、クラフト・サイエンスの分野より有利で優れている。私たちも、このような経験をもっている（Räsänen 2002）。それにもかかわらず、クラフト・サイエンスは、過去、現在、および未来の、科学的、芸術的、技術的な視野から、テキスタイルとテキスタイル製品を研究することができる。過去には、クラフト・サイエンスのような科学は存在しなかったもので、これまでは他の科学がそのために必要な研究を行ってきたと結論づけることができる。

しかしながら、最も初期には、クラフト・サイエンスにおける科学的アプローチはデザイン、製作過程および人間活動と、それにかかわる様々な環境に向けられた（Anttila 1996, 9）。1993年に、以前の研究に基づいたデザインと製作過程の一般的な理論的パラダイムが出現した（Anttila 1993, 11）。この中のデザインと製作過程は、製品デザイナーとメーカーが自分自身で全ての過程を指揮する同じ人間である、一つに統合された過程であることが明らかになった（Kojonkoski-Rännäli

1995, 96)。また、クラフト・サイエンスは、それに関わる多数の異なった環境と、確実な科学の中で、物である工芸品にかかわる対話のうち、活動対象が人間であるような総合的な領域を代表していることが明らかになった。また、この図式は、テキスタイル、衣服、およびクラフト・デザインに関連する現象が、様々な科学の下で研究されるであろうことを示す。現在では、これらの基盤は大変一般的に経験によって知られているので、より明確な特殊化が行われなければならない。

### クラフト・サイエンスの存在論と語源学への他のアプローチ

デザインや製作過程をめぐって論を展開する代わりに、歴史的なできごとにしたがって推論の論理的な鎖を示すことができる。まず、クラフト・サイエンスの一般知識領域を見てみよう。人間が地球に存在する限り、様々な種類の製品のデザインと製作が存在すると仮定できる。これは、ポパーの世界—1で、材料が豊富である。そして、人間が後からやってきて、材料を変化させるための認識的な過程、影響、愛情、および身体的活動、あるいはポパーの思考の世界—2となる。図1に、これを見ることができる。

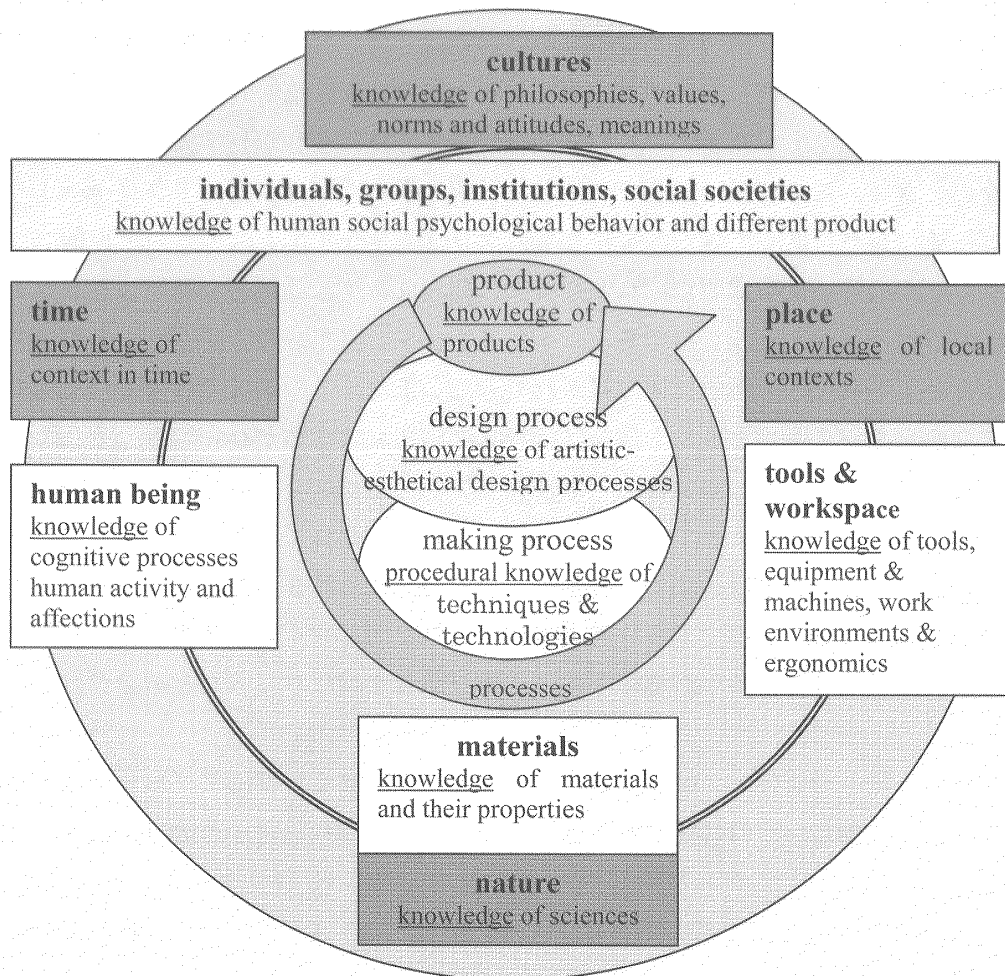


図1 The general knowledge domains in craft science.

倉元：テキスタイル、衣服、およびクラフト・デザイン研究への理論的アプローチ（翻訳）

ここでは、ポパーの世界—3に代表される文化的な実体のように、道具のあるなしにかかわらず、人間は異種の製品や工芸品を作成した（Niiniluoto 1994, 14-42）。時代とともに、人々は、彼ら自身が存在する地域的文脈のなかで、生活方法を創造してきた。社会が作られ、個々の生活と文化の多様な需要にこたえるために豊富な表現を伴った機構が作られた。それぞれの文化は、それ自身の哲学、イデオロギー、文化的価値、信念、意味、規範、態度、および習慣を持っている。これには、全て、商品開発を通じた文化の物質的な表現が反映されており、それはどんな社会階層にとっても必要な条件である。科学研究分野は、伝統的に、いくつかの独立した科学と科学研究アプローチとして特定された知識の断片を含むので、この背景は非常に複雑な科学研究分野を形作る。クラフト・サイエンスはそれ自身の歴史の中に含まれるべきでないのか。もし、そうならば、単に分析者が、知識領域の範囲と境界をそれが受入れられるのに必要なだけ拡大させられるならば、この情報はすべて分析することができ、それがどの工芸品とも違うことを明かにすることができる。

デザインや製作の過程で、考えや心的イメージを変換するために用いられる材料は、物理的、化学的特性のみならず、象徴的解釈における文化的な要素から構成される。ここでは、二つの異なった科学、例えば技術と教養科目は、1つの実体へと統合される。この現実クラフト・サイエンス

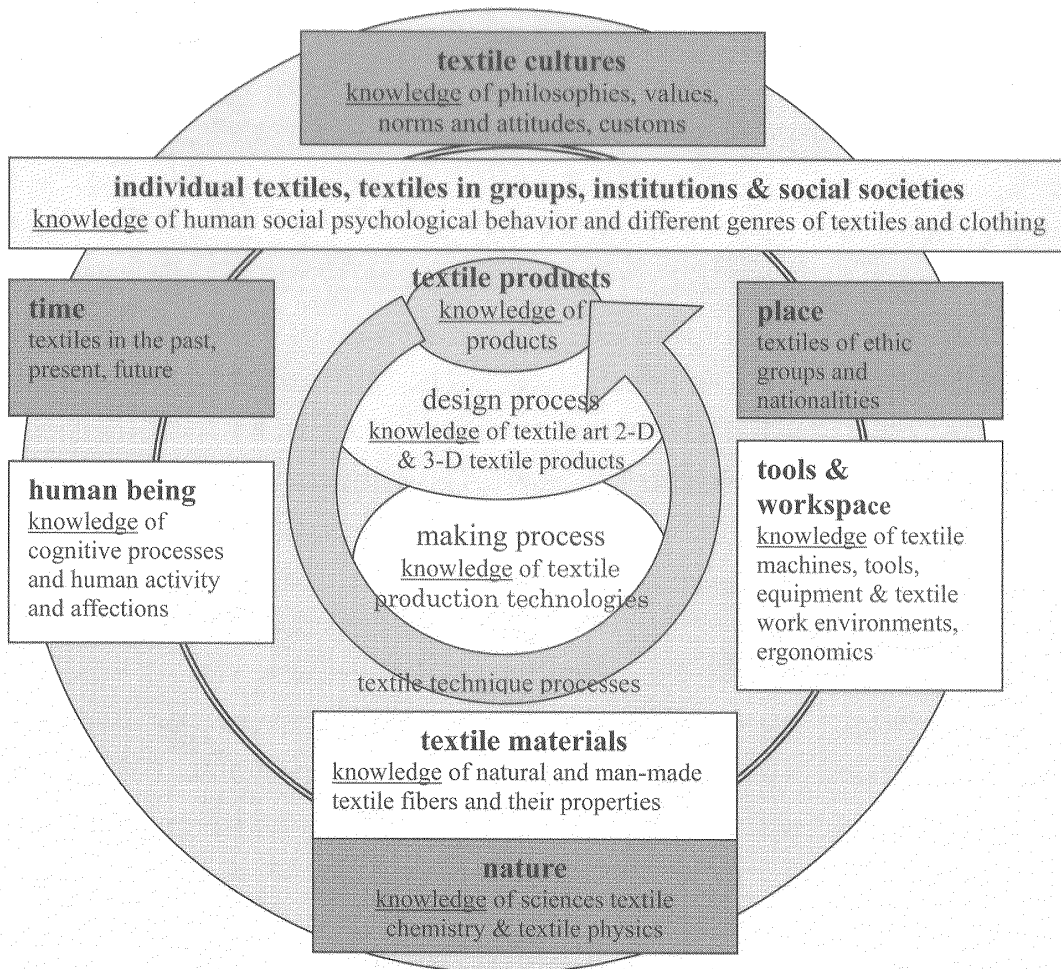


図2 The specific domain of knowledge in craft science (textiles)

の核となる要素である。研究において、クラフト・サイエンスは異なったアプローチ、解釈的、実証主義的、および批判的な研究を含む。

最後に、図は、重要な要素として製品それ自体を規定する。ここでは、それは、メーカーと関係した過去の仕事や完成した仕事を表しているの、研究の象徴的なポイントであると考えられる。この関係は初心者から専門家にいたるまで、どんなレベルにおいても技能を表している。ここでは、機能性と使用適性などの観点から、製品の総合的な研究が美的文化的な科学と技術に導入される。例えば、経済は社会環境や生産機構に依存する最優先の要素として現れる。それは、制限された空間としての最初のデザインの過程の結果が完全に波及する範囲の限定に影響を与える (Seitamaa-Hakkarainen 2000, 47, 79; Kaukinen 2002)。このように見ていくと、クラフト・サイエンスは知識の大きい総体を含んでおり、この研究分野の複雑さを全面的に理解するには、様々な観点からアプローチする必要がある。

前の部分では、現在の知識の要素と総体の一般的理解を目的とした。そこで、デザイナーが、はじめに、製作過程で用いる材料を決定し、あるいは必要な過程を進行させるために必要な材料に触れたならば、彼女は図2のように特有の知識領域に移っていく。

今、問題解決は、開かれた問題解決の空間から、より閉じた空間へと、その性質を変化させる。テキスタイル材料は非常に強力な文化的媒体である。クラフト・サイエンスは、生来、そこから工芸品を創造することができるどんな材料をも含むことができる。しかし、テキスタイルの教員養成教育ではテキスタイル研究に焦点が当てられてきた。こうして、テキスタイル研究は、全国的、国際的に、集団、機構、社会におけるテキスタイル製品、製作過程と材料・道具・設備、個々の製品としての歴史的現代的テキスタイルおよび衣服を含んでいる。

図1と3に示したように、クラフト・サイエンスの知識領域は、図3のようなそれらの間の様々な対話を伴う2つの単純な三角形によって説明できると思われる。

1番目の三角形は文化-時間-場所の文化の次元を表し、2番目の三角形はメーカー-材料-道具を伴うクラフト技術の次元を表わしている。この分割は、また、関連する研究においても見られる (Kaukinen 1999, 2001, 2002)。この重なりあう三角形の中で、メーカーは彼または彼女の文化の中心にある。この環境の中で、材料は製作過程で適切な道具と技術を決定する。メーカー-材料-道具の分野は、また、技術、技術研究の非常に基本的な要素である。図の中で、製品はクラフト製作者によって解釈された文化と技術との間の対話として位置づけられる。

最初の分野あるいは文化の構想をまとめる中で、時間と空間は、デザイナーがそこから彼らの考えやメッセージを生み出し、それらを考えやスケッチとして実在するものとして外面化する変数である。2番目の知識分野、メーカー-材料-道具を通じて、製品は材料から、目に見える形に変換される。これらの次元は、必要であり統合される。というのは、完成した材料の存在がなければ、私たちは、消費され、研究されるために加工され、製作される、どんな工芸品も持つことができないからである。

提示されたすべての変数はそれぞれの製品の中に存在しており、異なった重みを持つと仮定でき

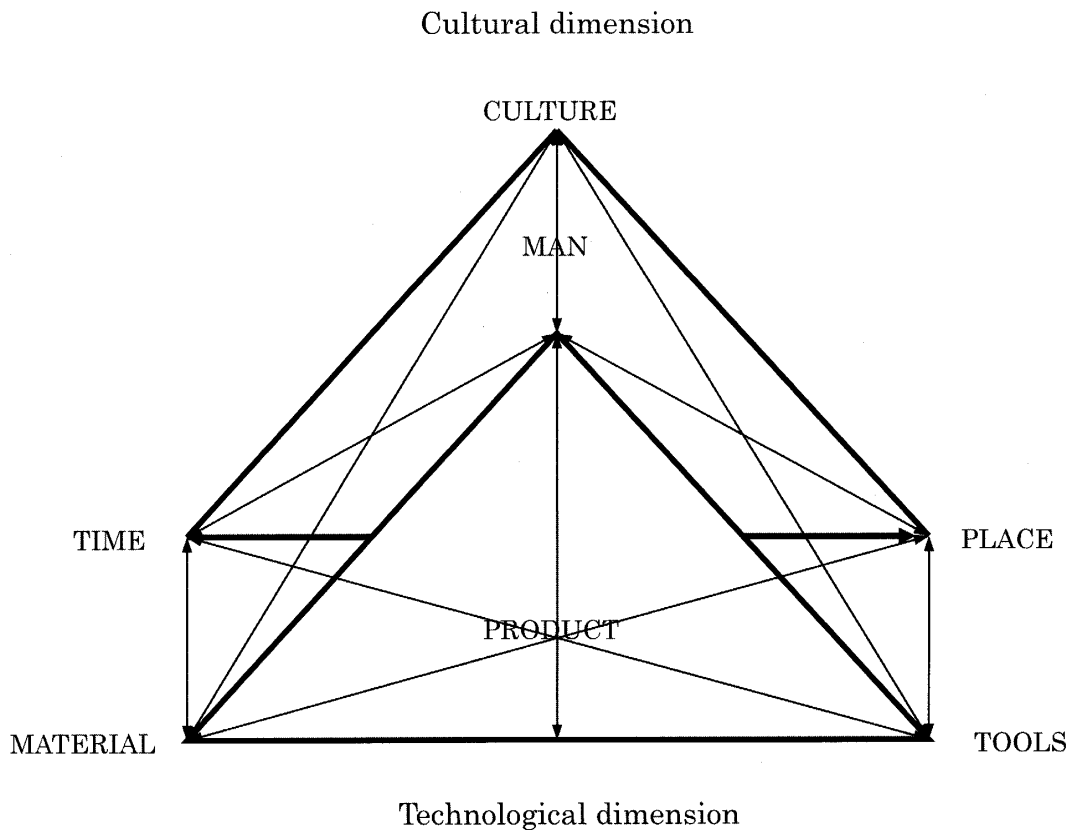


図 3 The cultural and technological dimension in craft science with equivalent parameters: culture-time-place and human being-material-tool.

る。図は、これらの対話を示していて、他の潜在的な理論的対話を考慮する。さらに熟考したところ明らかになったことは、三角形のそれぞれの頂点には、独立して、あるいは一緒に、観察され研究される少なくとも5つの異なった対話が存在する。この研究には、今なお検討の余地がある。

結びとより深く理解するための一つの段階として、私はメーカーの観点から3つの理論的対話を示したい。まず第一に、メーカーと受け手の対話がある。第二にメーカーの技術、文化と技術の対話がある。最後に、メーカーと材料の対話の間がある。この推論にしたがって、どんな変数も、考慮すべき変数とともに両方の次元を考慮しなければならないように見える。次の図4に、これを示した。

製品の受け手と消費者の間の対話はここで可視化されている。図は、メーカーと受け手の両方が、彼ら自身の世界観、経験、および期待から、デザインと製作過程のコミュニケーションに入ってくることを示している (see also Uotila 1996, 45)。このようなコミュニケーションにおいては、活動としてのメーカーの知識や技能は、与えられた文化、時間、場所だけではなく、材料、道具、技術をも含むので、すべてがまとめて盛込まれている。

デザインのメーカーは同時に存在する問題解決過程で、美的、技術的、文化的に位置づけられる。メーカーと消費者の対話では、受け入れられる製品を作るために、対話の中で示されたほとんどの

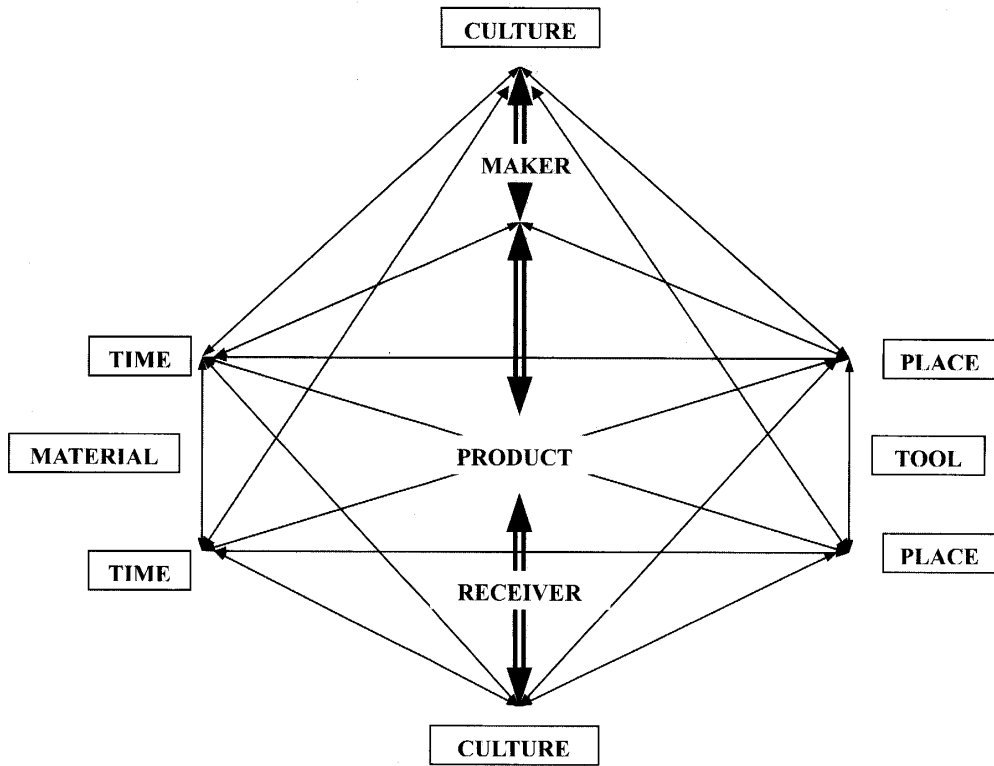


図4 The dialogs of the maker and the receiver as mutual communication fields.

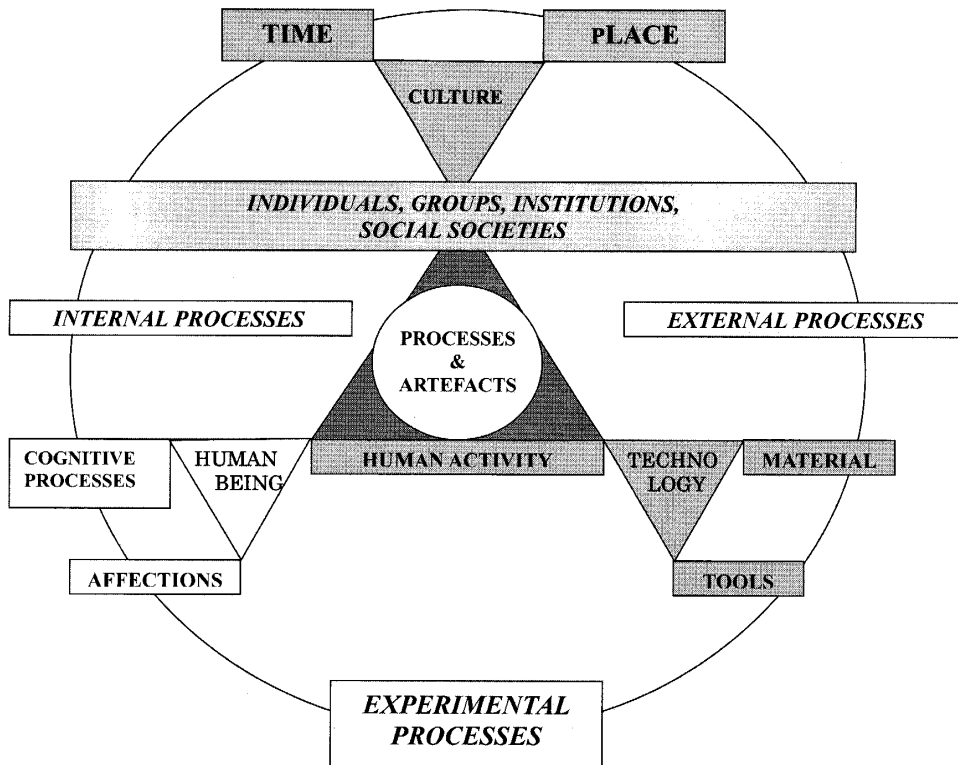


図5 The dialog of the makers skill in the design and making processes in craft science.



要素の間に、合意とバランスが共通して現れなければならない。

2番目の、図5は、この論文の中で示された、人間の技能に関連する昔の研究分野を示している。ここでは、それは、人間、文化、技術の間の対話を伴う知識の一般的領域として説明されている。技能は、知覚し、考え、問題を解決することといった内的過程として、これらの対話の中で提示されている。技能は、材料や道具とかわる人間活動の中に見られる知覚過程、心理的、知覚的活動と共に外的過程の中に現れる。第3番目の技能の発達を含む人間の過程は、経験的過程である。クラフトの技能と技能一般は、初心者から専門家にいたるまで、その人自身の活動なしには獲得されない。この経験的領域は主に暗黙の知を含んでいる。

最後の対話として、図6にメーカーと材料の間に存在するものを示したい。

製品から物理的材料を除くことはほぼ不可能なので、次の図は、領域に特有の知識としてのテキスタイル材料のうえに打ちたてられる。テキスタイル製品は、実際、情報のパッケージである。クラフト・サイエンスの研究課題として、すべての分野が考慮されなければならない：繊維（ファイバー）、糸、2次元材料、布地（ファブリック）、テキスタイル（織物）構造、および3次元のテキスタイル（織物）。これらの可視的要素と関連して、一方では物理的、化学的および生産の情報 が考慮され、もう片方では文化的な情報が考慮されなければならない。これは、価値、イデオロギー、規範、態度と習慣、地位役割、民族性、アイデンティティ、ジェンダー、性別、文脈性、同一化、

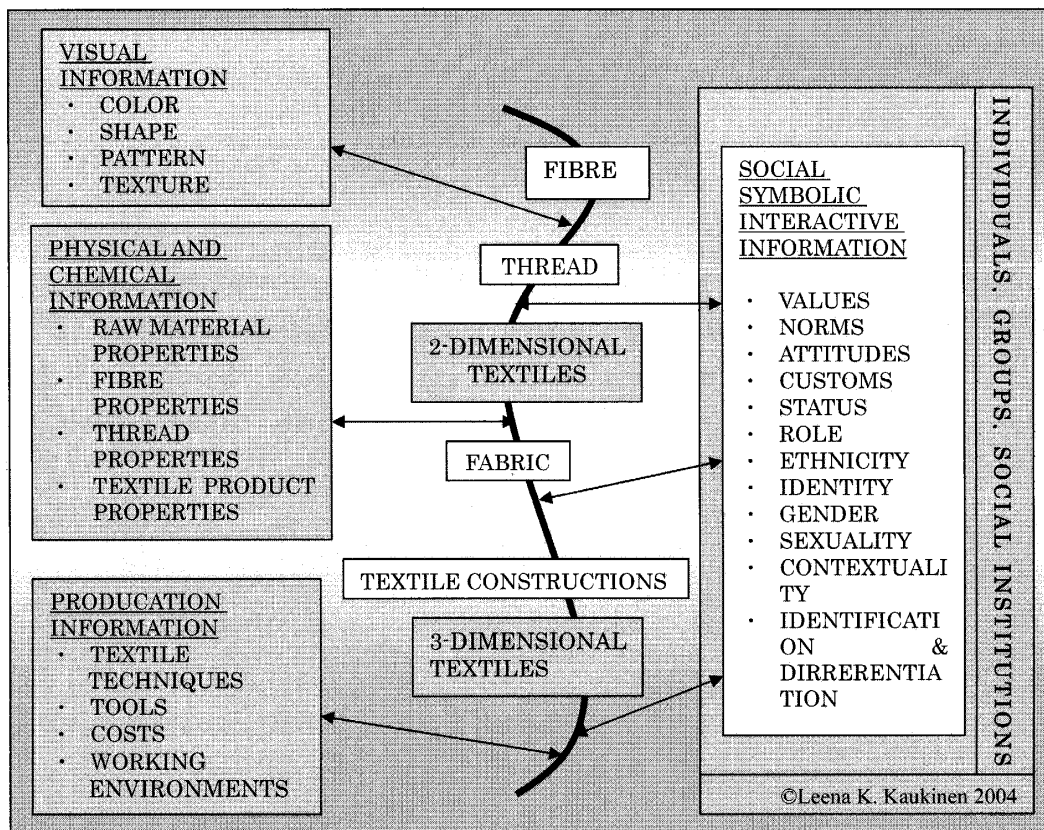


図6 The dialogs of the maker and the material. A textile product is a package of information.

差異化などのような社会的象徴的情報をともなう個人，集団，および社会機構からなる。これらのことが製作過程の材料に反映されなければならない。私たちはやっと，クラフト・サイエンスに関する知識についての研究の開始点に到達したところだと言わねばならない。

## 結論

結論として，本論文では以下のことが明らかになった。

- クラフト・サイエンス研究の対象は総合的な領域であり，文化的技術的知識を，製品のデザインと製作過程における人間の内的，外的，経験的な過程と結合させている。製品製造においては，これらの要素はメーカーと製品の受け手との間のコミュニケーションの中に存在する。
- クラフト・サイエンスでは，物質文化としての生産に関する一般的な領域知識を取扱う。しかし，物質特有の知識領域は不可欠のものになり，そのときこれに関与する材料が決定される。それぞれの材料は様々な科学領域を持つ。
- 文化－時間－場所と人間－材料－道具の間には，これまで知られてきたよりも多くの対話が存在することが，理論的に確認された。提示された要素の間で，様々な対話が可能である。しかし，さらなる研究が必要である。
- クラフトにおける人間の技能は，文化的技術的な環境における，内的，外的，経験的過程としてのデザインや製作過程の中で，理論的に発展する。

## 参考文献

- Anttila, P. 1993. *Käsityön ja muotoilun teoreettiset perusteet. (The Theoretical Foundations of Craft and Design)* Minerva. Porvoo-Helsinki-Juva: WSOY
- Anttila, P. 1996. *Tutkimisen taito ja tiedon hankinta. (Skill of Research and Knowledge Acquisition)* Artefacta 2. Helsinki: Akatiimi Oy.
- Kaukinen, L. 1999a. *Crafts Science. Featuring the Essence of Textiles Clothing and Crafts Design Studies.* In Porko (red.) *Slöjd I informationssamfundet- konflikt eller consensus. Arbejdseminar på slöjdhöjskolen i Esjberg 1.-3. oktober 1998.* Vaasa: NordFo
- Kaukinen, L. 1999b. *Dimensions of research reflected by masters' thesis in textiles, clothing and craft design in Finnish universities between the years 1984-1995.* In Porko (red.) *Slöjd I informationssamfundet-konflikt eller consensus. Arbejdseminar på slöjdhöjskolen i Esjberg 1.-3. oktober 1998.* Vaasa: NordFo.
- Kaukinen, L. 2001. *Craft Science as a Reflection of the Third Culture.* In Nygren-Landgard, C. & Peltonen, J. (red.) *Visioner om slöjd och slöjdpedagogik.* Vaasa: NordFo
- Kaukinen, L. 2002. *Economics as a Constraint space in the Design and Making Processes.* *Techne A4/2002.* Vaasa: NordFo

- Kaukinen, L. 2002. Concepts and Domains of Craft Sciences, especially in Textiles, Clothing and Craft Design Studies. *Techne A4/2002*. Vaasa: NordFo
- Kojonkoski-Rännäli, S. Ajatus käsissäimme. Käsityön käsitteen merkitysisällön analyysi. (*The Thought in Our Hands. Analysis of the Concept of the Meaning of Handicraft*). Doctoral dissertation. *Annales Universitatis Turkuensis Serie C 109*. Turku: University of Turku
- Niiniluoto, I. 1990. Maailma, minä ja kulttuuri. (*The World, Me and the Culture*) Keuruu: Otava
- Pietikäinen, I. 1997. Development of the Reference Frame in Crafts Science. In Seitamaa-Hakkarainen, P. & Uotila, M (eds.) *Produkt, Fenomen, Upplevelse*. Proceedings of a Nordic Symposium Helsinki, 7-9 november 1996. Helsinki: NordFo
- Räisänen, R. 2002. Anthraquinones from the Fungus *Dermosybe Sanquinea* as Textile Dyes. Doctoral Dissertation. Department of Home Economics & Craft Science. Helsinki: University of Helsinki.
- Seitamaa-Hakkarainen, 1999. Suunnittelu, kognitio ja uusi tieto- ja viestintäteknikka (*Design, Cognition and Information and Communications Technology*). In Raunio, A-M. and Seitamaa-Hakkarainen, P. (eds.) *Liitteitä - Attachments*. Kirjoituksia käsityötieteestä. *Taitemia 16*. Saarijärvi: Helsingin yliopisto and Kuopion käsi- ja taideteollisuusakatemia.
- Seitamaa-Hakkarainen, P. 2000. The weaving-design process as a dual-space search. Doctoral Dissertation. Department of Home Economics and Craft Science Research Report no 6. Helsinki: University of Helsinki.
- Uotila, M. 1997. The world images in us, in work of the hand. In Heinonen, S. and Peräinen, T. (eds.) Helsinki: Suomen käsityöneuvosto.